

特 別 講 演

核医学近畿地方会 30 回のあゆみ

京都大学名誉教授 鳥 塚 莞 爾

昭和 43 年 6 月、京都大学医学部放射線医学講座、同附属病院放射線部長の福田正教授の提案により「放射性同位元素の診断、治療への応用ならびに生体に及ぼす影響の研究の進歩をはかり、近畿地方における研究者の連絡と協力および研鑽をはかること」を目的として、近畿核医学研究会発足の発起人会が開催され、会則が作成され、近畿核医学研究会が発足した。同年 9 月 21 日、福田教授を会長として第 1 回の研究会が開催され、以後この形式で 10 年間行われた。昭和 53 年、第 11 回研究会開催時に第 12 回 (昭和 54 年) より日本核医学会近畿地方会として行われることになり、会則の改定などが行われた。

地方会は年 1 回開催され、第 1 回～第 29 回までの出席者数と演題数はほぼ平行しており、最近数年間における出席者数は約 200 名、演題数は約 50 題で推

移している。

演題を in vitro 検査、機器・放薬他、循環・代謝検査、シンチグラフィの 4 分野に分けての推移では、当初は循環・代謝検査が多かったが、第 13 回 (昭和 55 年) 頃より循環・代謝検査は減少し、シンチグラフィの演題数が増加し、最近 10 年間の演題の 90% あるいはそれ以上がシンチグラフィの演題になっている。

in vivo 検査の臓器別の演題の推移では、最初の 10 年間は甲状腺、肺臓、肝臓の演題が多かったが、以後漸減し、かわって骨、腫瘍、心臓、脳の演題が増加し、ことに心臓の演題が多くなっている。

以上の経過において、近畿地区の核医学の研究、診療は着実に発展していると考えられる。また核医学診療は Prognosis, Patient care, Prevention の 3P に大きく貢献し、医療費の軽減に大きく貢献することが期待され、これらの実現に努力しなければならないと考える。

一 般 演 題

1. 正常海馬における ^{99m}Tc 脳血流製剤と PET による脳循環代謝量との比較

奥 直彦	植原 敏勇	清家裕次郎
		(阪大・放部)
橋川 一雄	森脇 博	山本 晴子
松本 昌泰		(同・一内)
西村 洋		(同・耳)
西村 恒彦		(同・トレサ)

脳血流 SPECT 用トレーサである ^{99m}Tc -HMPAO および ^{99m}Tc -ECD はそれぞれ多少異なる性質をもっているが、健常者における両トレーサの分布の差異については十分に論議されていない。この研究では健常

脳における ^{99m}Tc -HMPAO および ^{99m}Tc -ECD の集積の差異について検討し、さらにその原因を考察する目的で PET により測定した健常者の局所脳血流量 (rCBF) ならびに局所ブドウ糖代謝分布と比較したので報告する。対象は健常ボランティア延べ 20 名で平均年齢は 24 歳であった。20 名のうち 8 名は ^{99m}Tc -HMPAO と ^{99m}Tc -ECD の両者を異なる日に投与され、SPECT を撮影した。6 名は PET による rCBF 測定を行い、残り 6 名は局所ブドウ糖代謝分布を求めた。使用した SPECT 装置は日立メディコ社製 4 検出器回転型ガンマカメラ、PET 装置は島津社製 SET-2400W である。 ^{99m}Tc -HMPAO および ^{99m}Tc -ECD はそれぞれ 740 MBq を静注し、その 10 分後より高分解能コリメータにて撮影した。PET による rCBF 測定は ^{15}O -